

後藤健二氏と湯川遥菜氏によせて

牧野 静

超弩級の軍艦が溺死者の額にふれて砕け散らない限り、正義について語っても無駄である。

—— パウル・ツェラン¹⁾

1、ISIL の台頭と日本人拘束事件

2014年6月10日、イラク北部の古都モスルが武装勢力によって制圧された。彼らのはちに「Islamic State in Iraq and the Levant (イラク・レバントのイスラム国、ISIL)」と名乗り、その残虐性によって世界中を震撼させることとなる。IS (Islamic State)、ISIS (Islamic State in Iraq and Syria) やダーイシュとも呼称される彼らはその進撃直後からイラク治安部隊兵士の集団銃殺や斬首等の動画配信を行い、イラク政府への対立姿勢を明確に打ち出していた。また少数派であるヤズィード派教徒を包囲し、殺害、強姦、奴隷化と売却等の弾圧を加えた。この弾圧の事実が明らかになったことで国際社会は危機感を高めた。こういった状況を受け、アメリカは2014年8月にはじめてイラク領内でISILへの空爆を加えることとなる²⁾。

ISILへの国際的反発が高まり、軍事作戦が執行されるのと並行して、彼らはアメリカ人やイギリス人を攻撃対象とみなすようになる。8月後半から9月にかけてISILは拉致していたアメリカ人ジャーナリスト二名、イギリス人人道支援家一名を斬首し、その映像を公開した。その後もISILはフランス、スペイン、ドイツ、オーストリア、イタリア等複数の外国人を拉致し、身代金の要求を行っている。このような外国人の拉致と身代金の要求により、彼らの名は更に世界中に知られることとなる。

そしてこのISILが攻撃対象と看做した国の中には日本も含まれる。2015年1月20日、ISILは拘束した湯川遥菜氏と後藤健二氏の動画を公開し、身代金の要求と共に両名の命の刻限を告げた。邦人二名が拘束された衝撃は日本中を駆け巡った。ISILがインターネット配信を行ったことで、誰もがこの衝撃的な映像にアクセスすることが可能となった。囚われのしるしであるオレンジ色の囚人服を着せられ、跪かされた後藤氏と湯川氏、そしてそ

の背後に立つ黒ずくめの ISIL の兵士の姿が連日報道された。映像に登場した兵士は特徴的なイギリス訛りの英語を話す左利きの男で、英メディアによって「ジハーディ・ジョン」と呼ばれていた。邦人拘束以前にも複数の人質を殺害しており、ISIL の処刑人として既にその存在を知られていた兵士である。この兵士の登場は人質の命の刻限が逼迫したものであることを如実に示していた。

このキャプチャー画像が各種メディアに引用された。ネット上のキュレーションサイトもこぞって画像を引用した。それらは更に SNS 上の一般人にシェアされることによって拡散につく拡散をとげた。日本中がこの事件に注目しているといつて過言でないほど報道は過熱し、ネット空間もこの話題で埋め尽くされた。報道は単に邦人が拘束されたことを伝えるのみでなく、その背景にも及ぶ。そうして後藤氏がアフリカや中東などの紛争地域への取材を行ってきた実績のあるジャーナリストであり、友人である湯川氏を救出する為に渡航したという情報が、ついて駆け巡ることとなったのである。

この動画公開のおよそ四日後、日本時間にして1月24日に湯川氏の遺体とみられる画像、及び後藤氏の読み上げによるものと思われる ISIL の要求を伝える音声公表された。この時点で ISIL の要求は身代金のみではなくヨルダンに収監中の死刑囚サジダ・リシャウィの釈放を求めるものとなっていた（このリシャウィ死刑囚は2005年に首都アンマンで発生した爆弾テロ事件の実行犯であるとされている）。そして続く2月1日に、後藤氏の殺害が報道される。日本中に激震が走ったこの拘束事件は、動画公開からほどなくして残酷な結末を迎えることとなったのである。

2、日本政府の対応及び日本における報道

ISIL による邦人拘束を受け、日本政府の対応は人質救出を第一にするものではなく、また世論もそれに追従するものであったことを、ここで確認しておく。

邦人二名の拘束を時系列順に追うと、まず2014年の8月15日までに湯川氏が ISIL に拘束され、次に2014年10月中に後藤氏が ISIL に拘束されたことが分かっている。しかし邦人拘束以降も、政府の発言には ISIL を強く刺激するものがある。湯川氏拘束の動画は8月15日に公開されており、国内でも報道されている。当然安倍総理もその事実を知っていた筈だが、9月23日にエジプト大統領と会談した際には「イスラム国が弱体化し、壊滅につながることを期待する」と述べている。これは ISIL への空爆を肯定する文脈で行われた発

言である。また安倍首相は2015年1月17日にもISILに敵対する周辺諸国に対しISIL対策費用として約2億ドルの支援を表明している³⁾。

さらに菅官房長官は2015年2月2日付の会見で政府としては身代金を用意せず、犯人側と交渉するつもりはなかったことを明らかにした⁴⁾。身代金を用意しないことが人質の殺害へ繋がる選択肢であることは容易に想像がつくにもかかわらず、である。また安倍首相が表明した2億ドルの支援についても、ISILは日本を「2億ドルで十字軍に志願した」と表現し、その報復として兩名を殺害する意図をあらわにしている。ISILが提示した身代金の金額が2億ドルであり、安倍首相が表明した周辺諸国への資金援助と同額であることも、非常に唆的である。政府対応がISILを刺激したことは疑いようがなく、従って人質の救出を第一とする意向を持つものとは到底見受けられない。

国内の加熱する報道は世論を形成していった。元衆院議員の渡部篤氏やエジプト出身タレントのフィフィ氏等、数多くの著名人が拘束された人質についてテロの被害にあうのは自己責任であるという見解をメディアに示した⁵⁾。これら著名人の見解はテレビのワイドショーで報じられ、ネット上のキュレーションサイトにまとめられ、更に拡散された。2015年2月7日の読売新聞紙上に掲載された世論調査の結果は、「危険地域のテロ被害は自己責任である」とするものが83パーセントを超えるという衝撃的なものであった。自己責任論が噴出し、大々的に被害者に対するバッシングが起こるのは、2004年にイラクで日本人が拘束された事件時の状況と似通っている。この時武装勢力は自衛隊の撤退を求めたが、当時の首相であった小泉純一郎氏はそれに応じない構えを示した。4月に拘束された3人の救出には成功するものの、同年10月に拘束された香田証生氏は殺害された。この当ても被害者へのバッシングが吹き荒れ、香田氏の遺族が謝罪声明を発表している。ISILによる邦人拘束事件も、政府が強い対決姿勢を打ち出したことや、自己責任論が噴出するという点で、2004年のイラク日本人拘束事件と似た様相を呈しているといえる。

2004年当時とは異なる点もある。それはネット空間における、通称「ISISクソコラグランプリ」とされるコラージュの創作合戦と、「ISIS(アイシス)ちゃん」という萌えキャラの創出である。前者は「ISISにまつわるクソのようなコラージュ」の意であり、拘束された後藤氏と湯川氏、ジハーディ・ジョン、或いは後藤氏の母親であり動画公開後に後藤氏の生還を望む記者会見を行った石堂順子氏の画像を素材とすることが多く、ツイッター上で活発にコラージュ画像の投稿が行われた。後者はISILの兵士を2頭身から3頭身ほどの美少女の姿、いわゆる「萌え」の絵柄にデフォルメして投稿するものであり、発祥は匿

名掲示板の2ちゃんねるである。2016年2月現在においても、「ISIS クソコラグランプリ」「ISIS ちゃん」を Google で検索するとそれぞれおよそ 99,500 件、621,000 件がヒットする。このコラージュ、及び萌えキャラ化が爆発的な流行を見せたことは海外メディアからも注目を集め、賛否両論が巻き起こった。フランスやカナダからは笑いでテロに対抗する姿勢としての評価と、人質がまさに命を危険に晒されているときに不謹慎であるという批判、両方が寄せられた。またイスラム圏のメディアにはこのコラージュ等を愚かであると断罪する傾向がある⁶⁾。

これらの創作が笑いでテロに対抗しているという評価については疑問を呈さざるをえない。前者は命の危険に晒されている人質も、息子の生還を望み、涙ながらに会見を行った後藤氏の母親をも笑いの素材として扱うものであり、テロの被害者を嘲笑する性格を色濃く持ち合わせる。ISIL のテロリズムに対抗するというよりも、むしろテロリストも、テロの犠牲者も、またそれらについて真摯に向き合うことも合わせた全方位への冷笑以外にその意図が見いだせないものである。殺戮を繰り返す ISIL の兵士を美少女の姿に描くことも、深刻な事態を（日本ではアニメ・漫画文化の台頭によりカジュアルに消費しやすいものの筆頭として扱われることが多くなった二次元美少女の）コンテンツに置き換えることで、真摯な直面を避ける態度だといえるだろう。

おおまかな雑感の域を出ないが、政府の対応にも、報道にも、形成された世論にも、そしてネット上で巻き起こったコラージュや萌えキャラの創出にも、ある種の共通項を見出すことが出来る。それは徹底した切断処理である。多くの日本人にとって、遠い異国の紛争地域というのは一生出向くことのない場所である。そのため拘束された邦人が「自己責任」と断罪されることは、多くの日本人に悲劇が無関係なものであることを確認させ、安心させるものである。事態が逼迫し人質の命の刻限が告げられたときでさえ、国内ではコラージュと萌えキャラの創出がピークを迎えた。これは切迫した事態を嘲笑し、恐れることも怒ることも悲しむこともなく事態を冷笑することを志向する姿勢、人質のために心を痛めることを徹底的に拒絶する姿勢であるように見受けられる。また、これらの投稿をまとめる記事を掲載することで閲覧数を稼ぎ、広告収入を得ていたとおぼしきキュレーションサイトにいたっては言語道断である。そのようなまとめサイトによって、このおぞましい創出はさらなる拡散を遂げている。

メディアに対する違和感はもう一点ある。それはジャーナリストである後藤氏にまつわる事柄は大々的に報道され、湯川氏にまつわるものはさほど多くないという点である。非

常に残酷なことに、ISIL も人質の殺害に順序を設けた。湯川氏を殺害した上で後藤氏を生かし、その状態で要求を釣り上げたのは、人質の価値を見積もったのであったと推察される。そしてそれは、日本国内の報道の熱量や世論によっても裏付けられてしまう。二人が殺害されたのちも、後藤氏を悼む声に比べ湯川氏を悼む声は極端に少なく⁷⁾、著名人で湯川氏を悔やむ言葉を述べたのは UNHCR 特使である女優のアンジェリーナ・ジョリー氏以外にはほぼ見当たらない⁸⁾。人質両名は自己責任のバッシングに晒され、誹謗中傷を受けた。さらにはその命の価値の軽重をすらはかられてしまったのである。

幾らかの慰めは悲劇を悼み、故人の遺志を継ごうという動きの存在である⁹⁾。悲劇から一年後の2016年2月1日、東京四ツ谷駅前で行われた集会は、後藤氏を悼むのみでなく、反戦を訴え、「憎しみの連鎖を断ち切ろう」「平和のために行動しよう」と呼び掛けるものであった。それは「戦争、貧困、差別をなくさなければ、テロはなくなる」という主張を含む。後藤氏の遺志を継ぐとするこれらの主張を導出する源を明らかにするため、次節以降では後藤氏及び湯川氏の来歴を踏まえた上で、彼らの志向したものを探る。

3、後藤氏と湯川氏の来歴

ここでは後藤氏と湯川氏の背景を概観することで、彼らの渡航の動機の推察を試みる。

後藤健二氏は1967年に三人兄弟の末っ子として生を受け、父親の仕事の都合上引っ越しの多い幼少期を送る。生みの母である順子氏は後藤氏の生後まもなく離婚、後藤家を離れている。法政大学在学中に湾岸戦争（1990年8月2日 - 1991年2月28日）が勃発、イスラエルに渡航して現地の大学生に話を聞いたことをおそらく契機とし、ジャーナリズムの世界に興味を抱く。大学卒業後は日立立子会社勤務等を経験したのち、1996年に映像通信会社インデペンデント・プレスを設立した。ジャーナリストとしては何年間かの下積みの後、アフリカや中東などの紛争地帯の取材に携わっている。2006年に第53回産経児童出版文化賞フジテレビ賞を受賞した『ダイヤモンドより平和がほしい』をはじめとし、紛争地域の子供たちを取材した著作を複数出版している。2011年3月11日に東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）が発生すると、被災地において日本ユニセフ協会の記録員を務める。2014年4月にシリアのアレッポ地区にて反政府勢力である自由シリア軍と接触した際、拘束されていた湯川氏解放の為に動く。後藤氏と湯川氏が友人となったきっかけの事件である。そして後藤氏は湯川氏救出の為に、2014年10月にシリアへと渡航、10月中旬にISILに拘

束されたとされる。

後藤氏の周辺人物として非常に印象的なのがその生母の石堂順子氏である。彼女が2015年1月23日に行った記者会見は涙ながらに息子の生還を望むものであったが、それ以外の情報の多さが報道陣を大きく混乱させた。順子氏は後藤氏の妻である城後倫子氏とは会見の直前まで没交渉であり、そもそも城後氏が後藤氏と婚姻関係にあることを知らなかったこと、生後間もない女兒の存在を会見直前に知らされたこと等を明らかにした。これらの発言から推察される家庭環境の複雑さはゴシップ誌に恰好のネタを与えることとなった。また順子氏が原子力の廃絶を訴えたことも大きな驚きを与えた。老齢の順子氏が ISIL と IAEA（国際原子力機関）を混同したのではないかという推察もなされた。順子氏が一般社団法人「ピースビーンズジャパン」の代表であったことも幾らかの憶測を呼んだ。この団体は幾らかスピリチュアルな性格を持ちながら福祉活動を行うものである。

新聞やテレビ等が後藤氏の勇敢さを讃える一方、複数の大手週刊誌がその私生活を暴こうと躍起になり、ネット上の言論空間には心無い中傷が多数見られた。例えば元自衛隊幕僚長田母神俊雄氏は2015年1月28日付のツイートで以下のように発言している。

イスラム国に拉致されている後藤健二さんと、その母親の石堂順子さんは姓が違いますが、どうなっているのでしょうか。ネットでは在日の方で通名を使っているからだという情報が流れていますが、真偽のほどは分かりません。マスコミにも後藤健二さんの経歴なども調べて流して欲しいと思います。(@tosho_tamogami のつぶやき)

現代日本において在日韓国人に対するヘイトは深刻な問題となっている。そしてこの田母神氏の発言はネット空間に溢れる在日差別の文脈で後藤氏が国籍を疑われていることに同調するものである。後藤氏が日本人ジャーナリストとして拘束され日本政府宛に脅迫のメッセージが届いている際に後藤氏の国籍に疑義を差し挟むのは、後藤氏が救助の対象たりうるかという問いのように見受けられる。既に湯川氏が殺害され、一刻の猶予もない緊迫した状況下において、人質が救助に値するかを問い、またその問いに在日差別を利用し助長したのが、この国の自衛隊の元幕僚長なのである。

本稿は後藤氏の来歴を探ることで故人を貶めることを意図しない。後藤氏が幾らか複雑な来歴を持つことは想像に難くないが、それを踏まえた上で考察したいのは、後藤氏が紛争地域を繰り返し取材し、平和を願い貧困をなくそうと努めたこと、及び湯川氏と友情を

育んでいたことである。

湯川氏の来歴は常人の想像を超えたところにある。湯川氏の父親正一氏や湯川氏の知人の証言⁽¹⁰⁾、湯川氏自身のブログ⁽¹¹⁾から、その片鱗を窺うことが出来る。湯川氏は1972年に生を受け、「正行」と名付けられた。高校卒業後はミリタリーショップを開業し成功をおさめる。しかし2005年に倒産。この時のことを湯川氏は「ある人に陥れられ全てを無くしてしまった。」と表現している。2008年頃自殺を図る。男性器を切り落とし出血多量をねらったこと、妻が救急車を呼んだことで一命を取り止めたこと、以降女性として生きようとしたことを、湯川氏はブログに詳細に記している。なお湯川氏の妻は2010年頃に肺がんで亡くなっている。湯川氏はまた路上生活の経験も告白している。2005年の倒産後から2013年末までは実父である湯川正一氏とも音信不通であり、再会時には「遥菜」と改名していた。その湯川氏が最初にシリアのアレッポ地区を訪れたのは2014年4月である。渡航に際し、友人や家族には「生きることに限界を覚えた」「人生のラストチャンス」と語っている。またこのアレッポ地区滞在時に後藤氏と面識が生まれたのは先に紹介したとおりである。

湯川氏にまつわる報道がなされる際、その肩書きは民間軍事会社経営者とされた。確かに湯川氏は渡航前の2014年1月に「ピーエムシー株式会社」を設立している。日本船の警護や国外紛争地域への支援が目標だったようだが、登記簿にある青海のオフィスには活動実態がなく、具体的な警護の実績もない。正一氏の証言では湯川氏自身には軍事的訓練を受けた経験はほぼなかったとされる。湯川氏が設立した会社の実態も含め、湯川氏の渡航が何を目的にしていたのかは幾らか謎に包まれている。ただ、湯川氏自身はブログに以下のように綴っている。

残りの人生で多くの人を救いたい！

僕は2008年頃から何度も絶望や死に直面している。

今考えると死なずに救われてきたのは、歴史的偉業を成し遂げる

使命が有るのだと考えざれ負えない。(原文ママ、2014年4月14日の記事より)

語学力に乏しく、軍事に関わる活動実績もない湯川氏がシリアに渡航するのは、資金面を含め何らかの援助がなければ不可能なことのように見受けられる。しかし本稿ではそのような外在的な要因ではなく、湯川氏自身の内在的な動機の推測に留めたい。

湯川氏の動機を探る手掛かりは、やはり彼のブログであろう。このブログのテーマは多

岐にわたり、その中にはシリアへの渡航記録もある。しかしそれ以外にも、いじめの経験や、やや逸脱傾向にあるといえるほどの放埒な性生活の回顧等、人生を赤裸々に綴る記事も多い。湯川氏が自身を「川島芳子」の生まれ変わりであると確信している部分にも非常に大きな特徴がある。「男装の麗人」と呼ばれる川島芳子には、幼少期のいじめや自殺未遂を経て異性として生きる決意をした部分などから重なるものを感じ取っていたようである。また自身を日中戦争時のスパイとされた彼女の生まれ変わりと看做すことは、戦場に身を置きたいというファナティックなイメージへと繋がりをものにも見受けられる。

湯川氏はたびたびブログ上で孤独感や精神的疲労を綴り、自分が短命であるという予感や、占いや前世観などのスピリチュアルなものへの傾倒、人の役に立ちたいという切望、生きる意味を求めるような記述を行っている。先に引用した文章からも、湯川氏が人生の孤独と絶望に行動によって意味づけを行おうと願っていたことが読み取れる。

ブログからシリア渡航理由の決定打を見出すことは出来ないが、人とかかわりに繰り返し絶望しながらも人とのつながりを求め、使命を求め、生きられる場所を求めている人生の告白が、そこには記されている。そしてまた、渡航した先での現地の人々との交流によって、紛争地域への支援をしたいと願うようになる過程もあらわされている。

湯川氏と後藤氏がどのように友情を育んだかは今や二人のみが知る事となってしまった。しかし複雑な来歴を持ち、波瀾万丈な人生を生きるものとして、遠い異国の地を知りたい、伝えたいと願うものとして、また過酷な環境にある人々を支援したいという願いにおいて、後藤氏は湯川氏を尊重したのではないかと。湯川氏もまた後藤氏に信頼を寄せていたことが、正一氏によって語られている。

後藤氏がジャーナリストとして歩むうちに 1997 年に日本基督教団田園調布教会で受洗していたという点も見逃せない。後藤氏死亡後に 4 万リツイートを超えたことで話題となった後藤氏のツイートを、以下に引用する。

目を閉じて、じっと我慢。怒ったら、怒鳴ったら、終わり。それは祈りに近い。憎むは人の業にあらず、裁きは神の領域。—そう教えてくれたのはアラブの兄弟たちだった。

(2010年9月7日付、@kenjigotojp のつぶやき)

後藤氏にとっても、遠い異国の地に生きる人々は兄弟だったのである。

4、結びにかえて

ISILによる日本人拘束事件から一年が過ぎた。ISILは未だ壊滅には至っておらず、2015年11月13日にはパリが同時多発テロの標的となる事件も発生した。これを受けFacebookはプロフィール画像にトリコロールカラーを重ねる機能を実装した。瞬く間にFacebook上にトリコロールカラーが広まった。しかしこの動きについて、パレスチナやシリアでもISILに関連して沢山の人が亡くなっているにも関わらず、パリにかんしてのみトリコロールカラーを実装したこと、及びそれを利用することへの批判も集まった⁽¹²⁾。

日本では2015年5月14日に新たな安全保障関連法案が可決された。これは集団的自衛権の行使を限定的に認めるものであり、海外に派遣された自衛隊が米軍等と共に軍事作戦に従事することを可能にするものである。この成立を後押ししたのが、後藤氏と湯川氏が殺害された事実を受け、自衛隊が海外で軍事作戦を実行出来るように法案を改正すべきだという政府の意向であり、また世論である。この安保法案を「戦争法案」と呼び反対するデモもさかんに行われた。特にSEALDs（シールズ：Students Emergency Action for Liberal Democracy -s）の台頭には目を見張るものがある。10代から20代前半の若い世代に担われるこの団体は「自由で民主的な日本を守るための、学生による緊急アクション」を起こし、日本中に支部を持つ。但しこのSEALDsのデモにも複数の批判が寄せられている。SEALDsが用いる「国民なめんな！」のコールは日本国籍を持たずに日本に居住する人々との断絶をあらわすものであるという民族的マイノリティの視点からの批判がある。またSEALDsが内包する、或いはその周縁から発せられる性差別的言動について、社会学者上野千鶴子氏による批判が寄せられたこともある⁽¹³⁾。

ISILの台頭をめぐる世界情勢の混乱は未だ続いており、その影響は国内にも十二分にみられる。その中でも犠牲者を悼む運動や軍事行動に反対する運動があることは幾らかの希望を持って語ることが出来るものであるように見受けられる。しかしそれらの運動も一定以上の批判に晒されている。批判は起きてしかるべきであり、そうして一見「よい」ものに見受けられるものが含む切断が批判によって明らかにされることが、よりよい運動の達成に不可欠なものとなるであろうことを、今節では主張したい。

現代の日本は「平和」で「豊か」であるというイメージが、一般には流布している。しかし、世界は豊かさや平和、平穏で平凡で無事といえるようなもののみで構成されてはい

ない。世界には未だに紛争が続く地域があり、貧困にあえぐ地域がある。そしてそれは現代日本においても全く無関係な問題ではない。経済協力開発機構（OECD）が発表した子どもの貧困率ランキングにおいて、日本の子どもの貧困率は加盟 34 カ国中 11 番目に高いとされ、計算上は 6 人にひとりが貧困の状態にある。非正規雇用者の増大、長期失業者の問題等、国全体が富んでいるとは到底言いがたく、格差が増大しているのが現代の日本である。経済的困窮に加え、行き届かない福祉は家庭内の虐待や介護殺人を生む。2015 年には居場所を失った子どもが犠牲となる、川崎中一殺人事件や寝屋川中一殺人事件が発生した。1998 年から 14 年間、毎年 3 万人以上の自殺者が毎年発生していたのも日本の特徴である。以降は 3 万人を割っているが、15～39 歳の若年層の死亡原因の 1 位が自殺である状態が続いており、これは世界的にも類をみないものであるとされる。現代の日本においても、豊かでも平和でも平凡でもない人生を送る人がいる。貧困にあえぎ、極限状況に生き、命の危険に晒され、命を落とす人々がいる。その中のひとりが、かつての湯川氏だったのであろう。

湯川氏はシリア渡航を経て、紛争地域への支援を行いたいと言った。自身も極限の状況を生き延びてきた湯川氏は、遠い異国の紛争の地を、けっして遠いものとしては捉えなかったのではないか。同じく極限の状況にある人々に何らか自身との連続性を見出し、紛争地域にある人々を支援したいと願ったのではないだろうか。

また、後藤氏はその勇気を讃えられるのは、自身が死の危険に晒されることを省みなかったことのみを集約されるべきではない。一年以上も ISIL にとらわれ続けた湯川氏の救出を、ただひとり実行しようとしたのが後藤氏である。目立った実績を持たず、誰からも省みられることがなく、孤独と絶望を訴え、生きる意味を切望し、そうして遠いシリアの地に渡った湯川氏が生き延びることを、ただひとり行動が伴うかたちで願ったのが後藤氏である。後藤氏は紛争地域の子どもたちを何度も取材しただけではなく、友人である湯川氏のこととも切斷しなかったのである。

身体障害の当事者でもある倫理学者の野崎泰伸氏は以下のように語っている。

「究極の選択」に追い込まれたときにせざるを得ない「決定」とは、「処世術」なのであって、「倫理」ではない。そのような場面において、倫理学は何ら効果を発揮しない。倫理はもっと手前において思考されるべきものなのである。⁽¹⁴⁾

ではこの極限の状況に陥る前に思考されるべき倫理とは何だろうか。筆者は本稿の執筆を通じ、連帯を志向し、切断処理を注意深く拒むことをそれと定義したい。

大局を見ようとする、現実に対応すること、運動を大きくすること、そのような志向が見落とす、或いは黙殺するものがあることが、いずれ極限の状況の到来を要請する。パリが攻撃されたことに対して世界中の人々がトリコロールカラーに染まることで哀悼を示しても、シリアやパレスチナで連日のように命を落とす人々に思いを馳せる人々は、それよりはるかに少ない。テロを憎む声は大きくとも、テロの制圧の為に軍事作戦が行われ、巻き添えになって亡くなる人がいることに対する批判は、それより小さい。この圧倒的不均衡がテロの背景には存在する。そしてこの圧倒的不均衡が存在し続ける限り、武装集団を武力で制圧しても、第二第三の武装勢力が登場することは想像に難くないのである。

後藤氏を殺害したジハーディ・ジョンもまた、2015年11月に米軍の作戦によって殺害された⁽¹⁵⁾。彼がイギリス英語を話していたことは、ISILに加わる為にイギリスから渡航した兵士の存在を示していた。このようにISILへの渡航を志願した国外の若者は一定数以上存在し、2014年6月の時点でロシアからは800人強、フランスからは700人強、イギリスからは400人強とされる⁽¹⁶⁾。両親がボスニア難民である15歳と17歳の少女がオーストリアからISILに参加しISILの花嫁として広告塔になるも、兵士の性奴隷として妊娠、脱走を試みて殺害されるという痛ましい顛末⁽¹⁷⁾もまだ記憶に新しい。ISILに参加する外国人兵士には、既に紛争で戦闘に従事した経験のあるものも、自国での生活に見切りをつけ、給料と花嫁が支給されることに期待するものもある。この事実も、ISILが存在するシリアとその他の外国が、地理的な意味にとどまらず、地続きであることを示すだろう。

このような現実の状況にたいし切断処理を行うことは、最早何事をも問わないのと同義である。救われるべき命とそうでない命を峻別することが極限の状況を考えることではない。峻別が行われるような事態を可能な限り避けることにこそ、倫理は要請される。それは現状存在する問題、不均衡をまずはとらえ、改善しようと試みることから始まる。

切断処理を避ける為に必要なのは、複雑なものを複雑なまま、可能な限りの連続性を志向することでひらかれる地平を信じ、すべての命を尊ぶことである。そしてそのように振る舞うことでしか、起こりうる極限に対抗することは出来ないのである。

(まきの しずか 筑波大学大学院)

註

- (1) Paul Celan, *Gegenlicht*, 1949 (飯吉光男訳『パウル・ツェラン詩文集』白水社 2012年 p.149)
- (2) 吉岡明子・山尾大編『「イスラーム国」の脅威とイラク』岩波書店 2014年 pp.1-3
- (3) 日本経済新聞「首相、中東支援に2900億円超 カイロで表明」
http://www.nikkei.com/article/DGXLASF17H0D_X10C15A1000000/ (2015年1月17日公開)
- (4) ロイター「菅官房長官「身代金用意せず」、イスラーム国との交渉を否定」
<http://jp.reuters.com/article/suga-islamicstate-idJPKBN0L60J20150202> (2015年2月2日公開)
- (5) JCAST ニュース「「身代金、自分で払わせれば良い」「危険承知していた」 拘束された2人にネットで吹き荒れる「自己責任論」」<http://www.j-cast.com/2015/01/21225847.html?p=2> (2015年1月21日公開)
- (6) JCAST ニュース「イスラーム国「人質動画」コラ画像に海外反応 仏メディア「日本人もまたシャリーダ」と評価」<http://www.j-cast.com/2015/01/23226089.html?p=all> (2015年1月23日公開)
- (7) livedoorNEWS「湯川遙菜さんへの哀悼の声の少なさに違和感 海外メディアからは疑問の声も」
<http://news.livedoor.com/article/detail/9734330/> (2015年1月30日公開)
- (8) シネマトゥデイ「アンジー、湯川さんに追悼の意を表明」<http://www.cinematoday.jp/page/N0070085> (2015年1月26日公開)
- (9) IWJ Independent Web Journal「2016/02/01 「伝えなければいけないことがあるんです」——ISによる惨殺から1年、東京で追悼集会 教会仲間が語るジャーナリスト・後藤健二さんの「志」」
<http://iwj.co.jp/wj/open/archives/285538> (2016年2月2日公開)
- (10) 東スポ Web「<シリア日本人拘束>父が語る息子の謎…「改名」「女性化」「路上生活」」
<http://www.tokyo-sports.co.jp/nonsec/social/303801/> (2014年8月22日公開)
- (11) 湯川遙菜「♪ HARUNA のブログ ♪」<http://ameblo.jp/yoshiko-kawashima/> (2016年2月16日閲覧)
- (12) ITmedia ニュース「Facebook、プロフィール写真のフランス国旗化機能に「パリだけではない」の声も」<http://www.itmedia.co.jp/news/articles/1511/15/news012.html> (2015年11月15日公開)
- (13) NAVER まとめ「上野千鶴子さんの反セクシズム連続ツイート」
<http://matome.naver.jp/odai/2144051410508506801> (2015年8月26日公開)
- (14) 野崎泰伸『生を肯定する倫理へ——障害学の視点から』白澤社 2011年 p.202
- (15) AFP BB NEWS「IS、「ジハーディ・ジョン」の死亡認める シリアでの無人機攻撃で」
<http://www.afpbb.com/articles/-/3073788> (2016年1月20日公開)

(16)SoufaGroup, "Foreign Fighters in Syria", June 2, 2014 <http://soufangroup.dom/foreign-fighters-in-syria/>

(17)livedoorNEWS 「「イスラム国」の花嫁となった少女2人脱走に失敗して撲殺か」

<http://news.livedoor.com/article/detail/10886187/> (2015年11月28日公開)